

ファン・エイク兄弟作《ヘントの祭壇画》の図像再考 —聖母マリア像と楽園風景の分析から—

仲間 絢（京都大学）

フーベルトとヤンのファン・エイク兄弟の共同制作による大型多翼祭壇画、通称《ヘントの祭壇画》（1432年完成、聖ヤン教会、現聖バーフ大聖堂奉納）については、なかでもその油彩技法やパースペクティブに関する独創的な革新性が評価されてきた。「神秘の子羊の礼拝」の場面を中心として展開する12枚のパネルで構成される本作は現在も学際的な共同作業に基づく大規模な修復が進行中である。近年の美術史研究はこれらの科学的調査を反映し、画期的な光の扱いによる「視覚の革命」や、新たに明らかとなった作品の制作当時の表現形態に焦点を当てている。それに対して、本発表ではこれらの知見を踏まえたうえで、図像学的分析に立ち返り《ヘントの祭壇画》に通底する主題性を再考する試みである。

本作の複雑かつ特殊な絵画構成は、図像の選択においても際立った独自性を有しており、それらの意味内容については多くの部分で研究者の見解が相違してきたのも事実である。本発表では、これまで看過されてきた特殊な表現である上段のデエシスを構成する聖母マリア像と、緻密な風景描写を確立した下段の楽園の表現の連続性に着目し、さらに中心的主題「神秘の子羊の礼拝」との関連について、聖母マリア崇敬に由来する図像の神学議論の歴史的背景に基づく観点から考察する。

ヤン・ファン・エイクは、初期フランドル絵画、ひいては、北方ルネサンス美術において流行した中世に由来する「花嫁神秘主義」の題材を、もっとも多彩かつ複雑に展開した画家としても知られる。とりわけ前世紀の豊富な既存研究ではその網羅的な考察がなされてきた。しかしながら《ヘントの祭壇画》については、これらの視点に関して再考の余地が残されている。本発表では、外装の「受胎告知」のパネル群から連続する「処女懐胎」、「閉ざされた庭」、「聖母戴冠」などの「受肉」の奇跡を実現した「マリアの神秘的子宮」をめぐる図像群を分析の起点とする。冠を戴く天上の花嫁として描かれた内装の聖母マリア像では、純潔な子宮の内部にロゴスである光が満ちることで「受肉」を実現する「聖なる容器」の特性が強調されている。さらにその子宮の特性を暗示する光が満ちた楽園としての「閉ざされた庭」の緻密な風景表現へと有機的な繋がりを考察する。

《ルッカの聖母子》をはじめとするファン・エイクの聖母子表現における花嫁神秘主義の図像的伝統の確かな継承と発展は、代表作《ヘントの祭壇画》の特殊な表現性において浮き彫りとなる。ファン・エイク作品が重視してきた救済史的枠組みにおける「受肉」と「結婚」の神秘に基づいた本作の主要な意味性を検討する。聖堂の典礼空間における信者の霊的装置としての機能を高めたであろう本作の神秘主義に基づく図像的側面の分析により、北方ルネサンスの傑作《ヘントの祭壇画》の独自の革新性について議論を拓いていきたい。